

<牧会ミニ通信>No.24 2020.10.11

横浜山手地区は、多くの家庭がメイドを雇っている外人居留地です。S姉は、不二家の社長の次男の家庭のメイドから、中国人の事業家のメイドをしていた頃に、教会に導かれました。しかし、70歳を迎えたあたりから働けなくなり、晩年は生活保護を受ける身となりました。

わずかに親戚筋はありましたが、折り合いが悪く、行き来はなかったようです。要するに彼女は天涯孤独の身でした。晩年は、教会から歩いて5分ほど、6畳一間のアパートに住んでいました。日頃から、奉仕と祈りに励み、教会にはなくてはならない存在でした。子宮ガンを患い根岸の日赤病院で手術となりました。二三か月後、様態が急変したのです。妻と共に見舞いに伺いましたが、時すでに夕方となり、思いを残して失礼しました。

ところが、夜中の2時ごろ、日赤から連絡が入り、亡くなった、とのこと。彼女のそばに最後まで寄り添えず、独り身で残したことが、後々まで痛恨の極みとなりました。葬儀をすませ、彼女の部屋の片付けをしなければなりません。妻と二人で部屋に入り、驚きました。四方の壁には、聖句が張りめぐらされています。さらに、天井一面にも聖句です。おそらく、床に伏しても見えるように工夫しておられたのではないかと思われました。礼拝で「タリタ・クミ」「娘よ、起きなさい」との御言を示されると、それまでの万年床を取り上げられた、とも聞いています。部屋を整理していると、献金袋に目がとまりました。その額を見て唾然としました。レプタ二枚を献げた婦人の話がここにもあったと思われました。

教会から5分かからない距離を、あちこちの壁とか扉に触れながら、それでも、約30分ほどの時間をかけて礼拝参加を心がけていらした、その姿には心打たれました。貧しく独り身の生涯ではありましたが、さわやかに信仰に生きた生涯を送られました。

「彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである」(ヘブル11:16)。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次